

朝日新聞 昭和20年8月15日付 社説「一億相哭の秋」

(前略) 畏くも、万邦共榮の大方針の下、帝国の自存と東亜の安定とを庶幾しつつ、陸海将兵の勇戦、百僚有司の励精、一億衆庶の奉公、いずれも最善を尽くせるもかかわらず、戦局は必ずしも好転せず、(略) 終に我が民族の滅亡をすら招来する虞(おそれ)あるのみならず、人類の文明をも破却すべき虞すら感ぜられる。

されば億兆の赤子、皇祖皇宗の神靈を併せ思わせられた結果、終に政府をしてポツダム宣言に応ぜしめたとの有難き御言葉を拝しては、億兆一心、凜として声なく、唯々光輝ある君国当面の悲運のために相懐いて哭(こく)するの情に堪えないものがある。(略)

如何に困苦の時が続こうとも、嶮岨の途が続こうとも断じてこれを意とすべきではない。挙国一致、国体の護持を計り、神州不滅を信ずると共に、内に潜熱を蔵しつつ冷静以て事に当るならば、苦難の彼方に洋々たる前途が開け行くのである。

加うるに、被抑圧民族の解放、搾取なく隷従なき民族国家の再建を目指した大東亜宣言の真髓も、また我国軍独自の特攻隊精神の發揮も、ともに大東亜戦争の経過中における榮譽ある収穫と言うべきであり、これらの精神こそは大戦の結末の如何にかかわらず、双つながら、永遠に持筆せらるべき我が国民性の美果としなければならない。(略)

君国の直面する新事態について同胞相哭し、そして大君と天地神明とに対する申し訳なきで一ばいである。(略)

我が民族の優秀を信じ、豊なる希望を未来に繋ぎながら、誓って宸襟を安んじ奉らんとの決意を今ここにまた新たに堅くせんとするものである。

まったくの文体の変容と戦後の朝日新聞

朝日新聞 昭和20年11月7日付 第一面

支那事变勃発以来、大東亜戦争終結にいたるまで、朝日新聞の果たしたる重要な役割にかんがみ、我等ここに責任を国民の前に明らかにするとともに、新たなる機構と陣容とをもって、新日本建設に全力を傾倒せんことを期するものである。

今回、村山社長、上野取締役会長以下全重役、および編集総長、同局長、論説両主幹が総辞職するに至ったのは、開戦より戦争中を通じ、幾多の制約があったとはいえ、真実の報道、厳正なる批判の重責を十分に果し得ず、またこの制約打破に微力、ついに敗戦にいたり国民をして事態の進展に無知なるまま今日の窮境に陥らしめた罪を天下に謝せんがためである。

今後の朝日新聞は、全従業員の総意を基調として運営さるべく、常に国民とともに立ち、その声を声とするであろう、いまや狂瀾怒涛の秋、日本民主主義の確立途上来るべき諸々の困難に対し、朝日新聞はあくまで国民の機関たることをここに宣言するものである